

# 果 試 ニュース

第 22 号 平成 17 年 3 月



愛媛 34 号

今年 1 月、「愛媛みかん、34年間連続日本一の座から転落」というニュースが新聞に大きく取り上げられ、みかん関係者ならずともその記事には目を引かれたことと思う。一方、某新聞では愛媛みかんの低落ぶりを厳しい論調で連載した。16年産みかんは度重なる台風の影響があったとは言え、低糖度、浮皮・腐敗果の多発などにより、価格的にも他の主産県に比べ低く評価される結果となった。

「みかん日本一」という響きは目に見えないインパクトを消費者や流通業者に与え、少なからず販売面でプラスに働くと考えられる。今後は光センサー時代に対応して品質面を重視した栽培方法、品種を取り入れ、強力な「愛媛みかん日本一」を再構築していくことが急務である。生産者の皆さん方には一層の奮起をお願いするところであるが、団体・行政・我々研究機関も一体となって懸命の努力を傾注していかなければならないと考えている。

今回の果試ニュースでは「温暖気象下における樹冠上部摘果による隔年結果防止と光センサー合格率の向上」、「うんしゅうみかん発芽期における尿素的葉面散布」、「愛媛34号の特性について」の3課題を掲載した。特に樹冠上部摘果の技術については、最近の大型台風の襲来、秋の豪雨、気温の上昇など今盛んに論議されている地球温暖化が現実問題としてひたひたと迫り、みかんの浮皮多発や品質低下などの問題が現れ始めている状況下での対応技術として注目される。これらの研究成果が現場に活かされ、かんきつ経営の強化に役立つことを願っている。

「伊予の国住んでみたしと蜜柑剥く」（第3回みかんの国俳句大賞優秀句）

これは群馬県の方の投句であるが、伊予の国には、山一面の蜜柑が似合うのである。